

@ハイデガーフォーラム(高千穂大学)
9月22日(土)

・氏名 加藤 皓士(名古屋大学 博士研究員)

・題名 贈り定めとしての存在の歴史とは何か

・序論

ハイデガー哲学において「歴史(Geschichte)」が決定的に重要なものであったということを否定するものはいないだろう。しかし彼の考える歴史は「存在の歴史」である。更に言うのであればそれは「贈り定め(Geschick)」であった。存在の贈り定め、世界がそれを中心に「転回(Kehre)」するような存在、「es gibt」の歴史。それをこそハイデガーは思考するのであった。

それは存在が贈り定められ、そのため各々の存在が與えられるような「出来事(Ereignis)」でもある。存在の自己贈与。それはすべての事物が各々有るべき場所に「集中(Sammlung)」するような出来事である。もしくはそこへと至るための「没落」の可能性が與えられることである。ハイデガーの考える歴史は「運命(Schicksal)」でもある。そのため決して客観化されて述べられるようなものではなく、また「物語」でもない。むしろ出来事そのものであり、今ここで絶えず起こっているようなものである。

この発表ではこの贈り定め、存在の歴史を「裂け目(Riss)・亀裂(erkluftung)」と「言葉(Sprache)」に注目して考察するようにしたい¹。ハイデガーは歴史をこの裂け目と言葉を中心に考えているように思われるからだ。そのさいテキストは『哲学への寄与』と『言葉への途上』を中心に検討してみたい。

また第二部では現代の存在の贈り定めである「ゲシュテル(Ge-stell)」について検討したい。周知の通り、ハイデガーは「技術」の本質について考えていた。そしてゲシュテルはこの技術の本質であり、現代における存在の贈り定めとして考えられていた。このゲシュテルは贈り定めそのものから我々を引き剥がすような、危機をはらんだ贈り定めであると考えられている。

しかしハイデガーはこの危機の中に救いが蔵されている(保たれている)と言う。これを単なる希望的な観測として退けるのか、それとも光と見るのか分かれるように思われる。しかしまずここで言われていることを深く理解すること、そしてそこに込められた言葉を開陳することがまず求められているように思われる。危機そのものが救いを語っているということ、そこで考えられている転回の可能性について考えてみたい。それを通じてハイデガーの考える贈り定めとしての存在の歴史が何かについて、透徹した理解が得られると思われるからだ。

・1)歴史と裂け目

まず『哲学への寄与』から重要な引用を示そう。

現-存在とは、出来事の転回の転換の中心を裂き開くという生起(Geschehnis der Erklueftung der Wendungsmittle der Kehre des Ereignisses)である。裂き開くことは、自性一化である。特にかつ前もって、裂き開きであり、そこからそのつど、歴史的な人間と存在の本質現成、神々の近づきと遠ざかり(Nahung und Fernung)が(自性現起する)

¹ 裂け目、亀裂について、小柳(2012)、山本(2009)の研究から多くを学んだ。しかし裂け目と言葉、を歴史と絡めて話を進めているのは、本研究の独自性であるように思える。

歴史の最も深い本質は、次の事実の中にもともに休らう。それは裂き開く(真理に基づける)自性化が初めて、互いに必要としながら転回の性起の内ではじめて互いに向かい合ったり離れたりするようなものたちを、発源させるという事実である。立ち去られてあることと合図して一招くことのあいだで(zwischen Verlassenheit und Er-winkung)そのつど決断し(entscheidende)、ないしはここから非決断性へと自らを覆蔽する、近づきと遠ざかりとのこの裂き開きは、時-空の根源であり、戦いの王国(Reich des Streites)である。

〈現〉は本質現成する。それは本質現成(wesend)しつつ、現-存在の存在において引き受けなければならない。すなわち「間(Zwischen)」である。
(GA65.S.311)

まず細かく引用を分析したい。ここでは「生起における転回」が、「互いに向き合ったり離れたりするもの」を「発源させる」と言われている。この「互いに向き合ったり離れたりするもの」とは、神々と「歴史的な人間」のことであろう。両者の近づきと遠ざかりそして転回が歴史を理解する上で重要なものとなると言えよう。

しかしこれらと亀裂はどのように関わるのか。亀裂が奔る。そこで神々と歴史的な人間の近さと遠さが生じる。そのさい「転回」がその中心にある。亀裂とは、まず神々と人間という遠い存在の区別が起こることを指す。そしてこれは遠いはずのものが「互いに向き合ったり離れたりする」するということであり、そこでは近さが生じている。

近さと遠さは転回のうちで生じる。転回がこの両者の狭間であり、その意味では転回がこれらを集約している。転回はハイデガーにおいて重要な意味を持った言葉であった。そして多義的な意味で用いられている。しかしここでは転回を「投げるものが、投げられたものである」という意味で用いたい。

(跳躍は)開けの内へ突き入ることという意味で、存在の真理の企投の遂行である。しかも企投において投げるものは、被投的なものとして自らを経験し、言い換えると、存在によって自性-化されたものとして自らを経験するのである(der Werfer des Entwurfs als geworfener sich erfährt, d. h. er-eignet durch das Seyn)
(GA65.S.239)

(現存在は)出来事の転回における転換点であり、呼びかけと聴従的帰属性との対抗作用の、自らを開いてくる中心であり、自性領である(Das Da-sein ist der Wendungspunkt in der Kehre des Ereignisses, die sich oeffende Mitte des Widerspiels von Zuruf und Zugehoerigkeit, das Eigentum)。・・・
つまり出来事に聴き従い-属するもの、そして同時に現-存在に聴き従い-属するものが自性を委ねることとしての自性-化の、主宰的な〈真中〉である。すなわち、自己になることである(GA65.S.311)

投げられているところへと自己を投げるのが被投的企投である。存在によって自性-化されるよう自己を投げ込む。この場合、存在の真理の企投とは、同時に「存在によって自性-化されたものとして自らを経験する」ことであり、その意味で企投とはあくまで存在によって、もしくは存在の真理の企投として経験されるのである。

「呼びかけと聴従的帰属性との対抗作用」が「自らを開いてくる中心」、これが転回の転換点である。ここで存在の呼びかけと、それに応答する「真中」が開かれる。転回とは、投げる主体であったと思っていた人間が、投げるように促されているものとして投げられていることを自覚(覚悟)することであろう。

この転回において人間は「没落 (Untergang)」する。

存在それ自体はこの没落する者たちを必要とし、あるものが現象するときには、すでにこの没落するものたちを自性-化してしまっており、この者たちを自らへと差し向けてしまっている。それが存在自体の本質現成であり、われわれはこれを出来事と名付ける (GA65.S.7)

この没落することを通じて、人間は神々でさえなせえないこと、存在の根底から新しい言葉を発することができる。それを通じて「存在自体の本質現成 (Wesung des Seyns selbst)」が生じる。浄福なる神々は穢れを知らない。死すべき人間が、この大地の根底へと没落し、あらたに世界と大地をつなぐような「闘い (Streit)」もしくは時空を開くことができるのである。神々を作り出すことは出来ない。あくまで我々が「創設」できるのは存在であり、神々が己を示すための「場所 (Ort)」に過ぎない。

ではなぜこの意味の転回が近さと遠さと関わるのか。「合図して一招く」ものとは神々のことである。我々は「立ち去られ」たものとして、それを聴く。しかし神々は何かを語るのではなく、むしろ拒絶することを通じて己を示す (語る)。それは個々の言葉がそこから意味を汲み取るころへと、言葉の根源 (沈黙) へと拉し去る。それは没落するよう促す。そこで言葉が與えられる。神々でさえ己を示すのであれば、この言葉を必要とせざるを得ない。存在の真理とは、人間と神々が各々それであるところへと蔵するようなものであり、それは「震え (Erzitterung)」であるとも言われる (GA65.S.4)。この震えにおいて万物は己を示す、もしくは己を隠す。神々でさえこの震えを免れることはできない。

近さと遠さは転回へと促す。しかし転回は一度したら終わりではなく、絶えず転回し続ける。そして転回は伝播し、他者の転回を促し続ける。ハイデガーは現-存在を間として語る。それは架け橋である。このような促す呼び声に、人は決断するか逃避するかで応答する。亀裂はこのような転回の可能性、もしくは転回が己を示すことである。

まとめてみると、亀裂とは転回の可能性の贈与である。そこではもっとも遠い存在であるはずの神々と人が関わる (近くなる) 可能性が與えられ、この転回を中心に各々の人間に「没落」の可能性が與えられる。亀裂は没落へと人を促し、自性-化することを可能とする。亀裂は「呼びかけと聴従的帰属性との対抗作用の、自らを開いてくる」ことなのだが、しかしあくまでそれを決断する可能性を與えるのである。この亀裂にとどまり保持すること、それは神々と人間の対話ではないか。近さと遠さは、存在という深淵を中心とした転回の間で、神々と人間が対話することであると言えないだろうか。

・2) 裂け目と言葉

あらためて裂け目・亀裂と言葉がどう関係するのか検討したい。亀裂・裂け目と言葉が端的に結びつくのは、「痛み (Schmerz)」においてである。亀裂は痛い。亀裂は痛さという仕方、対象を示すことなく直接何かを語る。痛みと裂け目について『言葉への途上』収録の「言葉 (Die Sprache)」でハイデガーはゲオルグ・トゥラークルの詩を解釈しつつ以下のように語る。

痛みというのは、分離しつつ凝縮させる引き裂きにおいて、結び合わせるものである。痛いのは裂け目の継ぎ目なのである。(GA12.S.24)

痛みが継ぎ目であり、全てを凝縮している。それは語りそのものである。我々が語っている通常の言葉、それはこの痛みに由来するし痛みを語るのである。なぜ痛いのか。それは引き

裂かれるからである。どこどこへなのか²。この引き裂きは、ものと世界であり、そして現前と非現前である。

ハイデガーは言葉が「呼びかけられたもの自身へと」呼ぶという。それは「現前(anwesen)」から「非現前(abwesen)」へと呼ぶことで、存在者をこちらからあちらへ引き裂く。しかしそれは同時に、非現前から現前へと呼び入れることでも有る。ここでは「無・非現前」と「存在・現前」の行ったり来たりが生じている。それは「現前」へと呼ぶのであるが、しかしそこへと招かれたところは実は「非現前」であったのである。この行ったり来たりへと呼ぶのが言葉である。そしてこの拉し去るような声が痛みをもたらす。もしくはそれ自体が痛みである。この運動は否定を伴うがゆえに、痛みをもたらす。

極めて難解であるのだが、そこで示されている事柄を考えてみたい。「非現前」と「現前」は別のものではなく、同じ事柄に属しており、その意味では一つである。すべてのものは消え去りつつ有る。その途上において何かは何かとしてある。この途上に有ることが、存在することであり、これを対象化するとものとして現前するようになる。そしてこのようなものをものとしてあらしめる何かが「現前」、存在者の存在と呼ばれる。しかし本来、ものは消え去りつつ有るのである。

それではこの痛みは何を語るのか。有名な「言葉は語る」の箇所を引用してみよう。

言葉は語る(Die Sprache spricht)。言葉は命ぜられたもの(Geheissen)、すなわち、事物一世界、世界一事物を、区別するという事態のもつ間(Zwischen des Unter-Schiedes)という関連性のところに来させる、という形で、言葉は語ることになるのである。来るように命ぜられたものは、区一別するという事態から発して区一別そのものにまで到達せよ、と命ぜられているのである(GA12.S.26)

この区別はそれ自体が運動である。そこから発する区別と到達するよう促されている区別は、同一ではないが、「同じもの」ではある。しかし言葉はなぜ「命令」なのか。命令は区別から発して区別へと至るよう促す。この区別とは痛みである。それは亀裂であり、亀裂という仕方存在が己を語っているのである。命令であるのは、この声が己自身へと、それは己を超えて行く(非現前へと至る)ことでも有るのだが、至るよう促すからである。

世界と物は区別されつつも同一である。この区別は自己を超えて行くよう促す。ものと世界は互いに通じ合い固有性を放棄しつつ確証し合うような出来事として存在する。次節では『ブレーメン講演』について検討するため、ここで橋渡しとして講演『物』を引用したい。「物(Ding)」を分析する中で、物は神々と死すべき人間、天空と大地であるところの「四方界(Geviert)」を集約するものとして語られる。「鏡(Spiegel)」、「反照遊戯(Spiegel-Spiel)」を語る。

「自由の領野へと結びつけて拘束する反照のはたらき(das ins Freie bindende Spiegeln)」とは、固有化の折りたたむはたらきに支えられて、四者のおのおのがそれぞれ契りを結ぶさいの、仲立ちをする遊戯(Spiel)である。四者のいずれも、それぞれの分離された特殊なものにこだわって硬直するということはない。むしろ、四者のおのおのは、それらの固有化の内部で、一つの固有な本性に向かって脱固有化(enteignet)されている。このような脱固有化する固有化のはたらきこそ、「四方界の反照遊戯(Spiegel-Spiel des Gevierts)」にほかならない。この反照一遊戯を仲立ちとして、四者の単一性がめでたく結ばれるのである(GA79.S.18)

² 呼ぶということは、呼びかけられた者自身へと呼び入れることであり、それ故、常にこちらへ向かう方向と、あちらへ向かう方向が同時に有ることになる。こちらへというのは、現前することへの方向であり、あちらへというのは、現前しないことへの方向である『言葉への途上』(GA12.S.18)

ここで四者は互いに自己を放棄し自己を贈り合う。そこで鏡を通じて、四者は互いに離れ合い自己へと戻り合う。鏡であるのは、それがあくまで仮象であることを言うことではない。最初に鏡がある。奇妙なことであるのだが、なにかがあって鏡があるのではない。映し合うことが最初にある。これは非現前を通じて現前へと至り、現前を通じて非現前へと至るような運動である。もしくはものと世界が互いに映し合うような出来事である。脱固有化、それは現前から非現前への移行であり、固有化とは即脱固有化なのである。互いに映し合う。これが「四方界の反照遊戯」ではないか。ここで近さと遠さがめでたく結ばれている。

・3) ゲシュテルと出来事 危機と救い

ここから現代の贈り定めである「ゲシュテル」について論じたい。ハイデガーの技術論はいわゆる現代社会のアクチュアルな問題と絡めて論じられることも多い。しかしハイデガーの関心はあくまで存在の歴史であり、贈り定めとして技術の本質の問題が考えられている。ゲシュテルは技術の本質であり、それ自体は技術的なものではない。存在の贈り定めであり、それは語るものである。

ハイデガーは技術が一種の「こちらへと一前へと一もたらす (her-vor-bringen)」ことであると考えている。ギリシア語の「テクネー」を検討しつつ、この「こちらへと一前へと一もたらす」とは、もとは「ポイエーシス」であると言う。その一種として、テクネーがあると言う。そしてこのポイエーシスは「アレーティア」に属している。ハイデガーは技術の本質を問うさいに、このアレーティアとして考えようとする。

しかしこの意味のアレーティアが果たして現代技術とどのように関わるのだろうか。ハイデガーは「立てる・駆り立てる (stellen)」働きに注目する。それではゲシュテルとはどのような「立てる・駆り立てる」働きなのか。

駆り立てるはたらきの集まりにおいては、徴用可能なもの (Bestellbare) すべてが、徴用して立てられた物資の在庫 (Bestand) という形をとって、本質的にあり続ける。この駆り立てるはたらき (Stellen) がおのずとすべて集まり集約されたものを、いまやわれわれは、ゲシュテル (Ge-stell) と呼ぶことにしよう (GA79.S.32)。

ゲシュテルは立てるのだが、しかし存在者を「徴用して立てられた物資の在庫 (Bestand)」という形をとって「立てるのである。『ブレーメン講義』では、講演「物 (Ding)」から始まる。そこでは「あるといえるものすべてをかつてその本質から陥落させる」ものこそが、「戦慄させるもの (Entsetzende)」であるという。もしくは「不気味 (Unheimlich)」であるという。そこでは近さが失われている。

ハイデガーは農夫の仕事と比較しながら、現代技術を「徴用して立てる (bestellen)」ことと「挑発する (herausfordern)」こととして理解する³。現代技術はものを、そこから必要な成果を挑発すべきものとして扱うのである。ここでは詳述できないが、そこには近さがないためこの「徴用して立てる」働きにはしかるべき「隔たり (Abstand)」がないということが挙げられる。そこではしかるべき距離がない。そのため存在者はのぺーとした空間のなかに收容されることになる。そこでの立てる働きは「駆り立てる (stellen)」働きとなり、落ち着きなくものをそこかしこへと收容する。不気味であると言われるのは、そこには帰着されるべきところ (テロス) が

³「徴用して立てるはたらき (Bestellen)」によって、国土は炭鉱地区となり、大地は鉱床地帯となる。徴用して立てるこうしたはたらきは、かつて農夫が畑を耕して収穫した仕方とはおよそ異なっている。農夫が行う仕事は、耕地を「挑発 (herausfordern)」しはしない。農夫の仕事は、むしろ種をその成長力に安んじてゆだねる。つまり種が伸び栄えるべく「守り育てる (hueten)」のである。ところが畑を耕して収穫する仕事さえも、いつしか徴用して一駆り立てるはたらきへ移行してしまった。その同じはたらきによって大気は窒素に向けて、大地は石炭と鉱物に向けて、それぞれ駆り立てられ、さらに鉱物はウランに向けてウランは原子力に向けて、原子力は徴用可能な破壊行為に向けて、というふうに次々に駆り立てられる (GA79.S.27)。

ないこと、それにもかかわらず、もしくはそうであるがゆえに在庫は落ち着きなく招集されてしまうということである。ゲシュテルは「集約する(Versammlung)」働きであるのだが、しかしそれは落ち着く先なく、落ち着かずにそうされるのである。そこでの立てる働きは、主体もなければ客体もなく、根拠なしにそこかしこへと促されている。

この命運としてのゲシュテルは、端的に「危機(Gefahr)」であると考えられている。なぜそのように考えられるのか。まず危機についての引用を確認しよう。ハイデガーは危機を三つに分節化する。これらが隠蔽されていることが危機である。

元有を守蔵する山脈としての死(Der Tod, das Gebirg des Seyns)、元有の根本輪郭としての痛み(Schmerz, der Grundriss des Seyns)、元有の固有財産のうちへの開放としての貧窮(Armut, die Befreiung ins Eigentum des Seyns)。この三つの目印を機縁として、危機は次のことに気づかせてくれる。つまりその困窮(Not)そのものは、かすかすの巨大な困難の只中で一向に現れないし、危機そのものは危機としてあるのではない、ということにである(GA79.S.57)。

危機は危機そのものとしてあるのではないと考えられている。また他の箇所ではゲシュテルの危機は隠蔽であると言われる。しかし危機は特に、「元有を守蔵する山脈としての死、元有の根本輪郭としての痛み、元有の固有財産のうちへの開放としての貧窮」であると言われる。まず死について検討してみたい。

死は元有の本質から出来事として本有化される人間の現存在に属する。このように死は元有の本質を守蔵している。死とは、元有それ自身の真理を守蔵する最高峰の山脈(Gebirg)である(GA79.S.56)。

『存在と時間』では死は不可能性の可能性であると言われている。ここでは死は「元有それ自身の真理を守蔵する最高峰の山脈」であるとさえ言われる。なぜ死はそこまで重要なのか。『存在と時間』では死が本来的な「時熟(Zeitigung)」を可能とする。これは死が与えられることであり、この死の贈与は同時に生の「既在(gewesen)」の反復を促す。死は本来的な将来であった。それは到来する。しかしそれは「既在(gewesen)」への立ち返りであり、それであったところへ帰るように促す、もしくは拉し去るものである。

出来事も基本的にはこのような『存在と時間』時間とは変わらないように思われる。確かに『存在と時間』では死は各自のものであり、時間も現存在の時間性である。しかし死そのものは決して各自のものではありえない。死は亀裂であり、存在と存在者を、神々と我々を繋ぐものであり、そのため各自のものであるとともに、それは絶対的なものでもある。不思議であるのだが、死は存在者と存在という図式を超えているため、そうであるがゆえにそれらをつなぐ。死が死として到来すること、これが出来事ではないか。この出来事は言葉の故郷であるがゆえに、言葉が届かないところである。沈黙である。そのように考えると死と時間は別のものではなく同じものであるように思える。もしくは死と関係すること(死を反復すること)が時間であらう。

存在は不可分なものであり、そうであるがゆえに与えられることも、分けられる(言葉になる)ものでもない。しかしそれは与えられる。それは己を語る。それは不可能なことであるのだが、しかしこの不可能性がすべての可能性の根拠、根拠ならざる根拠である。それが「不可能性の可能性」としての死という可能性の開示である。死は生の「終わり(テロス)」であるが、しかしむしろ入り口である。死は生の始まりである。そしてこの始まりを促すものこそ、出来事であり、運命である。運命は届くものであるのだが、それは届かせるものである。そこには循環が有る。この循環に帰入することが裂け目であり、それは始まりと終わりが凝縮したところであり、歴史そのものである。

しかしこの死が隠蔽されているがゆえに、「元有の根本輪郭としての痛み、元有の固有財産のうちへの開放としての貧窮」もない。これがゲシュテルが危機であるゆえんであろう。死が隠蔽されているがゆえに、言葉(関係そのもの)も隠蔽されている。そして何もできなくなってしまう。ゲシュテルが危機であるゆえんである。

しかしハイデガーは危機は救いでも有るという。有名な箇所を引用しよう。

危機が危機としてとるところには、「救いとなるもの(Rettende)」はすでにある。救いとなるものは、とってつけたように据えられるのではない。救いとなるものは、危機の横に並んで立っているのではない。危機それ自身が、危機としてある時、そのまま救いとなるのである。危機が救いとなるのは、危機がその本質からして救いをもたらすかぎりにおいてである(GA79.S.72)。

なぜ危機は救いなのか。それは危機が救いの可能性を蔵しているからである。救いは転回である。しかしなぜ「忘却を後追いする」・「置き換え(Verstellung)」としての危機が救いになりうるのか。あらためて転回について考えてみたい。転回は没落するよう促し、それを通じて新たな言葉を紡ぐ可能性を與える。危機はその意味で救いである。亀裂は同時に救いである。裂け目は転回するよう促す呼び声であり、危機はそのため救いを可能とする。

しかし現代の贈り定めであるゲシュテルの場合、危機が隠蔽されている。なぜ隠蔽が救いの可能性を示すのか。まさしくゲシュテルという危機は、転回の可能性をこそ塞ぐのではないか。ここが考えるべきところであるように見える。ハイデガーは慎重であるが、私が考えるにまさしく「聴くこと」と「反復する」ことを学ぶ可能性をこそ與えているのではないかと考える。

隠蔽は存在の贈り定めであるが、しかしある意味では我々がそうしているのである。この隠蔽はまさしく存在と人間の共同作業である。存在と人間が互いに消し合っている。その意味でゲシュテルにおいて、存在と人間の同一性が達成されている。しかしこの達成は互いに無化しあうものでしかないため、まさしくこの同一性をこそ消してしまう。しかし同一性が消える瞬間にこそ、新たな転回の可能性が示されているとも言える。それは死すべき我々が見抜くべき「存在の閃光」であり、「あるといえるものへの観入(Einblick in das was ist)」の瞬間ではないか。そこでは我々の実存こそ問われる。

最後に『技術への問い』でハイデガーは、救いを「芸術(Kunst)」のうちに見出している点に触れてみたい。ここでは詳述できないが、ハイデガーは芸術の中で特に「詩作(Dichtung)」を特別視する。そのため詩について結論で簡単に考察してみたい。

・結論(歴史と出来事)

死は世界という詩における、元有の山脈である。

Der Tod ist das Gebirg des Seyns im Gedicht der Welt. (GA79.S.S56)

ハイデガーは「世界という詩(Gedicht der Welt)」について語る。ハイデガーからすると、言葉が存在の家であり、言葉が世界を動かしており、世界そのものでも有る。そのため世界は極めて動的なものであり、そして言葉もまた動的なものである。ゲシュテルはこの言葉が何も語らないことであり、そのため存在者はすべて無に浮いている。この無は現代では科学や専門家が作り出している。それは誰も信じていないが、信じていないがゆえに我々を動かしているようなものである。それは足場であり、絶えず踏みしめなければ揺らぐような足場、われわれの大地である。

言葉は世界は、本来動いていなければならない。その動きの軌跡(それは行き先と来た先の間)が詩ではないだろうか。そして死がこの詩の隠れたテーマであり、死が世界の中を駆け回っている。神は過ぎ去っている。どこへなのか。それは将来である。しかしこの将来は過去である。なぜなら未だ来たらぬものは、すでに存在してしまっているものだからである。死ん

だ人は過去の人と言われる。過ぎ去って関わりがないと。しかし過ぎ去ってしまったとは、先へ行ってしまったとも言える。過ぎ去ってしまった、それは過去(由来)という未来(将来)へと過ぎ去ってしまった。死は可能性そのものであり、未来そのものであるのだが、しかしそれは過ぎ去ったものとして現れる。

神は過ぎ去りしものであり、今ここにいないものである。それは死ではないのだろうか。そして「死すべきもの」と人が言われる場合、人は神と関わることができ、神の声が聴けることを指すのではないか。死は指し示されるものであり、指し示すことでもある。歴史はこの過ぎ去ってしまったもの、そこにできた裂け目(言葉・転回)を中心に人々が動くことである。そこでは距離そのものが、もしくは次元そのものが生まれる。そこでは通訳不可能であり、その都度全く新しい何か(世界)が誕生する。それは贈り定め(モイラ)である。この贈り定めを反復すること、これが歴史である。

歴史には終りがある。それは死である。しかし死は向こう側(超越)なのではなく、いまここにある。ハイデガーはそれを「区別」・「出来事」・「沈黙」として語る。それは限界であり、言葉が届かないところであると同時に、言葉がそこから来るところであり、そこへと届けようとしているところである。神はこの限界(秘密)そのものであり、その意味で限界を超えて、この世界から過ぎ去ってしまったものであろう。しかし本当は過ぎ去ってしまっているのはこちら(人間)であり、ゲシュテルとはこの過ぎ去ってしまつて、過ぎ去ってしまったことも忘れ果ててしまったところのことではないか。それは地の果てである。

そのように考えると芸術、特に詩がなぜゲシュテルにおける救いになりうるのか、そのヒントがあるように思う。詩は至らせるものであり、更には至り得ぬところ(死)へと至らせるものである。それに対してゲシュテルは至り得ぬところは至り得ぬものとして、到れるところへと至らすものである。ここでは不可能性の可能性(死)を巡って決定的な態度の違いが有るように思われる。もしくは限界の理解が決定的に異なる。詩の場合、限界こそがすべてを可能にする。しかしゲシュテルの場合、限界は克服されるべきものであり、もしくは回避されるべきものである。この限界の問題、それは死と言葉の問題でも有るのだが、そこに救いの可能性が蔵されてはいないだろうか。

人間は没落する。それを通じて大地と天空の新たな関係(言葉)を創設する。それを通じて、神々と人間が対話することとなる。そこで新しい世界が開示される。これが贈り定めであり、歴史である。「es gibt」、それは歴史の秘密であり、それは言葉の由来であるがゆえに言葉にできない。そこから言葉が與えられ、それは絶えずこだまし続ける。しかしそこにはいわゆる同一性はないため、絶えず新しい。不可解であるのだが、無がそこでは「己」を反復しているのである⁴。ハイデガーは「秘密(Geheimnis)」を語る。しかし秘密とは隠れたものではなく、むしろ世界として沈黙が語ってしまっているということ、己を示してしまっていることではないか。それが詩ではないか⁵。

最後にハイデガーの言葉を引用して終わりたい。

言葉(その根源)

神々が大地を呼び、その呼び声の中でひとつの世界が反響し、そのようにしてその呼び声が現-存在として響くとき、そのとき言葉は、歴史的な語として、つまり歴史を基づける言葉として、ある。

⁴ ニーチェの永劫回帰との違い。

⁵ もしそのような理解が正しいのであれば、秘密とはまさしく現れてしまっていることであり、そのような立ち現れにさらされてしまっている自己を見つけることであろう。それは神から見捨てられている経験でもあるし、もしくは神と新たな関係を結びうるようなものとしての自己を見出すことでもありうる。秘密はそのため最も明らかなことであり、最も自明なことである。ゲシュテルはこの自明なこと(世界が存在すること)を見過ごしてしまつて、それを見ることなく当たり前として考えることであると言えよう。この秘密とどう関わるのかこそが、その人の人生を比類ないものとするのか、陳腐なものとするのか、その分水嶺になるように思われる。もしくは世界が與えられるのか、地に這いつくばるのかの亀裂であるように思われる。

言葉と出来事。大地の響き現れ、世界の響き返し。闘い、最も親密な割れ目であるがゆえに、裂け開けの根源的な蔵する働き。開けた場。

言葉は語られようが沈黙されようと、あるものの最初にして最も広い人間化である。そのように見える。しかし、言葉こそがまさしく現存する生き物にして「主体」としての人間の、そしてこれまでのすべてのものの、最も根源的な脱人間化である。そしてそれと共に、現-存在と、あるものの脱人間化の可能性との、基づけ(である)。

言葉は沈黙に基づく。沈黙は最も覆蔵されたされた尺度-保持なのである。それは尺度を初めて設定することによって、尺度を保つ。そのようにして、言葉は最も内的にして最も広いものにおける尺度-設定であり、接合権能とその接合肢の本質現示(出来事)としての尺度-設定である。そして言葉が現-存在の根拠である限り、この現-存在の内には、適度にさせる節制が、それも世界と大地の闘いの根拠として、ある(GA65.S.547)

・文献(ハイデガーを除き、著者姓のアルファベット順に並べる)

SuZ: Martin Heidegger. *Sein und Zeit*. 19. Auflage. Tübingen: Max Niemeyer Verlag, 2006.

Zur Sache des Denkens. Max Niemeyer Verlag Tuebingen 1969 辻村公一訳、筑摩書房、昭和48年

GA: Martin Heidegger. *Gesamtausgabe*. Vittorio. Klostermann

-Bd.9: *Wegmarken*. Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 2004.

-Bd.12: *Unterwegs zur Sprache*. Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 2004.

-Bd.65: *Beitraege zur Philosophie (Vom Ereignis)*. Friedrich-Wilhelm von Hermann (hrsg.), 1989.

-BD.79: *Bremer und Freiburger Vortraege*. Petra Jaeger (hrsg.), 1994.

・引用は創文社と理想社の翻訳を使用した。しかし本文の訳語と調整して適宜変更した。
小柳美代子(2012)『〈自己〉という謎 自己への問いとハイデッガーの「性起」』、法政大学出版局

山本英輔(2009)『ハイデガー『哲学への寄与』研究』、法政大学出版局